

★★

深月ユリア（フリージャーナリスト）

日本に波及する「トランプ現象」と全体主義の芽生え

★★

【トランプ大統領を再選に導いたトランプ現象】

年明け20日に共和党ドナルド・トランプ氏が大統領に再任する。

トランプ氏を再選に導いたトランプ支持者たちによる熱狂的な支持が「トランプ現象」と呼ばれる。根底にあるのは、経済不況によるエリート層と既得権益への不満、そして社会不満を抱く大衆の「陰謀論」への傾倒だ。

たとえば、米国の一部のQアノンと呼ばれる極右層は「悪魔崇拝し、児童売春組織を運営し人肉嗜好者であるディープステート(DS)と呼ばれる秘密結社が世界を裏で支配しており、トランプ氏は彼らと戦う」「トランプ氏は神に遣わされた救世主である」という物語を本気で信じている。

トランプ氏にとって、この物語は選挙のプロパガンダをつくるのに役立った。トランプ氏は「ディープステートがFBIや政府機関を操っている」「移民たちはアメリカ人が飼う犬猫を食べる」という陰謀論を唱えた。

【兵庫県知事選でも陰謀論が勝利】

そして、日本でも11月17日に開催された兵庫県知事選で、「トランプ現象」に類似した現象が見られた。

NHK党の立花孝司氏が流布した「斎藤氏は既得権益と戦っていて、悪者にされた。斎藤氏は悪くない」という、陰謀論がSNSやyoutubeで流布し、斎藤氏は再選した。

立花氏がかつて「バカな人たちをどうやって上手く利用するか、それはホリエモンがそう言う事を言っている。犬とか猫かと一緒なん」「バカにいれてもらう方法を考えるのが本当の賢い人」とインターネット番組で発言している。本当にこのような戦略を考え、それが今回成功したとしたら恐ろしいことだ。

トランプ氏と立花氏に共通しているのは、両者が陰謀論を流布したデマゴグであるという点だ。カルトについて研究しているジャーナリストの鈴木エイト氏は兵庫県知事選挙について、

「デマを信じ込む背景には『思考停止』があります。本人は『自分で考えて得た真実』などと思い込んでいますが巧妙に刷り込まれており、カルトが使うマインドコントロールの手法と似ているところがあります。よく『民意が反映された』という言い方がされますが、その民意の中にデマが入り込んでいけば、やはりそれも民主主義が歪められたということになります」と私見を述べた。

【全体主義の危険性】

デマゴグによって民主主義が歪められ、衆愚政に陥るとしたら、その先にあるリスクとして全体主義がある。

「いくらなんでもヒトラーと比べるのは極端」だと批判を受けるかもしれないが、筆者は斎藤氏・立花氏の一部の熱狂的な支持者たちはヒトラーに全権委任法を可決させた大衆同様の「思考停止」をしていたように思う。

かつて、ナチス・ドイツが台頭した背景にも、「ユダヤ人が世界支配している」という陰謀論が出回り、「ユダヤ既得権益を排除せよ」という風潮があった。金融業界にユダヤ人が多いのは事実だが、人を惑わすためには真実の中に一部の嘘を入れれば良い、というのは良くいわれることだ。

全体主義をつくるのは一人の独裁者ではなく、一人ひとりの人間だ。

ナチス・ドイツについて研究した哲学者ハンナ・アーレントは「アイヒマン（ゲシュタポのユダヤ人移送局長官）裁判」裁判を取材して驚いた。「アイヒマンは与えられた命令を淡々とこなす陳腐な小役人だった」で、「自分の行いの是非について全く考慮しない徹底した無思想性があった」そうだ。

この事実によりアーレントは考えた。

『全体主義』は、外側にある脅威ではないということです。どこにでもいる平凡な大衆たちが全体主義を支えました。私たちは、複雑極まりない世界にレッテル貼りをして、敵と味方に明確に分割し、自分自身を高揚させるようなわかりやすい世界観に、たやすくとりこまれてしまいがちです。そして、アイヒマンのように、何の罪の意識をもつこともなく恐るべき犯罪に手をそめていく可能性を、誰もがもっています。『全体主義の芽』は、私たち一人ひとりの内側に潜んでいるのです」

陰謀論のような「分かりやすい善悪の物語」は、脳が複雑な是々非々の状況を考えずとも楽に辻褄があう。現場に見聞して学ぶことをせずに、Xのリツイートボタンひとつで「正義の行い」をした気分になり、それは日々、虚無や孤独を感じる者に安堵感を与えることもあるだろう。

そして、善悪二元論により、仮想敵をつくることで、人々は団結する。そうになると、何が真実で何が嘘なのか追求するより、その集団の考えに同調する方が気楽になるのだろう。

アーレントによると、「人は嫌いな人が話す真実より、好きな人が話す嘘を選ぶ」という。